

あわくら 歴史街道

栗倉神社の 宝物と石造物

栗倉神社の創立は、天安元年(857)美作国津山中山神社より勧請して、長尾小田奥に斉祀しその後氏子地域のあまりにも広すぎて、祭礼の度毎に混雑や喧嘩口論も多く、貞観4年(862)6月長尾分け宮河原で協議の末、東栗倉へ四社、西栗倉へ四社と夫々分社することになって、現在もその通りの神社が宗教法人として年々祭礼を執行し、氏子により維持管理がなされています。こうした変遷を物語る地名が今も字名として残っています。例えば前述の分け宮河原、社礼、別府の勝ったり峠等々、この神社は江戸時代までは祠頭宮、志度宮等と呼んでいた頃もあったが、明治維新後は西栗倉在の郷名をもって栗倉神社と呼ぶようになったのです。古来より栗倉八社の総社として由緒ある神社なので、近世における当社への寄進の跡を追って見ることにしました。

1. 本殿の再建歴では、天正15年(1360)山名時氏父子が影石堂ノ尾城を攻略した際に当神社も兵火に罹って焼失
2. 明応3年(1494)小原庄竹山城主新免伊賀守貞重が再建
3. 寛永13年(1636)8月津山城主森長継が本殿再建費の一部を寄進(棟札現存)
4. 石灯笼1基 寛永13年8月津山藩主森侯重臣関成次、大塚主膳、各務主水、森正信等四名の寄進(棟札現存)
5. 石灯笼1対(高さ1間)享保19年(1734)9月津山松平候家老、安東常直の寄進
6. 石灯笼1基及太刀一振寄進文化6年(1809)津山藩家老、永見駿河守、石灯笼の高1間4尺とある。
7. 石灯笼1基(高さ1間4尺)文化6年(1809)氏子協力、別府善右ヱ門他の寄進
8. 菊花紋入高張提灯1対、神鏡1面(径1尺)宝暦9年6月(1759)京都御室派仁和寿有栖川宮侍臣鳴滝兵部卿より寄進
9. 神代太鼓1、金幣1振宝暦9年9月常陸土浦藩土屋侯(現茨城県)代官飯塚兵エの寄進
10. 金灯笼1対 寛政4年(1792)9月常陸土浦藩代官北山藤左ヱ門の寄進

明治以降の寄進分については省略しますが、ご参拝の節には雄旦大なる石造文化に触れてみようではありませんか。



▲ 栗倉神社本殿

人の動き 平成17年4月1日現在

- 人口 1,715人(-16) ●3月中の移動
- 男 819人(-3) 出生 0人 死亡 3人
- 女 896人(-13) 転入 8人 転出21人
- 世帯数 549戸(+2)

幸せ多い人生を

青木 満之 さん(引谷)
(金田) 早織 さん(大茅)

お悔やみ申し上げます

春名 邦子 さん(中土居) 3月 3日 72歳
稲田 ユキ子さん(中土居) 3月15日 93歳
高木 たねよさん(筏津) 3月31日 94歳

善意の窓 (村社会福祉協議会から) 平成17年4月1日~4月19日

おめでとうございます

大 茅 萩原 薫 様 長女瑠美様 結婚内祝
引 谷 青木 鍵一 様 二男満之様 結婚内祝
大 茅 金田 豊治 様 二女早織様 結婚内祝
塩 谷 野田 祐二 様 長男敬博様 結婚内祝

お大事にしてください

知 社 石丸 共榮 様 本人 退院内祝
塩 谷 井上サツ子 様 本人 退院内祝
下土居 野々上保志 様 本人 退院内祝
別 府 白岩 俊三 様 本人 退院内祝
下土居 春名 和恵 様 本人 退院内祝

今月の村税

固定資産税 1期

納期限：5月31日

納期限にご注意いただき、納付をお願いいたします。
また、口座振替の場合は残高確認など、よろしくお
願いいたします。

お問い合わせ先：西栗倉村役場総務企画課